

大好きなこのまちで、感謝と真心が
いっぱい食品を届けたい

今月の「シリーズ まち・ひと・しごと」は、実家が営むお肉屋さんやコンビニエンスストア、そして料理講師として働く傍ら、書道や絵など、マルチな才能と持ち前の好奇心で活躍している、「肉のながさわ」の看板娘、永澤里奈さんにお話を伺いました。

お肉屋さんの看板娘

布川の商店街のほぼ中心部に店を構え、長年、地域の方たちに愛されているまちのお肉屋さん「肉のながさわ」は、こだわりの豚味噌漬けや、注文を受けてから一つ一つ丁寧に作るコロケなどの揚げ物、お惣菜が人気の老舗。

地元の方はもちろん、わざわざ町外からも、多くのお客さんが足を運びます。

お店の自動ドアが開くと、カウンターの奥から元氣な笑顔で出迎えてくれたのは、看板娘の永澤里奈さん。「肉のながさわ」三代目店主、行美さんの長女です。

小さいころは、実家が肉屋やコンビニをやっていることがコンプレックスだったという里奈さん。商売人の家系に生まれ、幼いころから大人たちの苦勞を見て育ち、「こういう仕事はしたくない。」と思っていたそうです。そんな里奈さんが、この店で働きはじめたのは今から約4年前。短大卒業後すぐのことでした。



肉のながさわ

📍 利根町布川 3310 ☎ 0297-68-4129
🕒 9:30 ~ 18:30 (日曜定休) 📺 3台
🌐 <https://nagasawa4129.crayonsite.info/>

きっかけを伺うと、「短大で栄養士の資格は取ったんですけど、当時は、栄養士よりも美容関係とか、もっと収入が良くてキラキラした仕事に漠然と憧れていました（笑）。でも、就職活動をして、ピンと来る仕事が見つかったんです。そんな時に、ふと、自分の家にはこんなに立派な店があって、これを自分でうまくやれば凄いものになるんじゃないか？って思っちゃったんです（笑）」と、実家のお肉屋さんで働くことを決意したそうです。

三足のわらじ

「肉のながさわ」では、肉屋だけでなく、町内（中田切）で、コンビニ（セブンイレブン）も経営しています。

オープンから31年目を迎えたというこのコンビニも、実は、里奈さんのもう一つの職場。学生時代に、アルバイトで手伝いはじめ、今ではオーナー補佐として週5日のペースでお店に出ています。

また、栄養士の資格を持つ里奈さんは、得意な料理の腕を活かし、イオンモール千葉ニュータウン内にある「ABCクッキングスタジオ」で、料理講師も勤めており、「三足のわらじ」ならぬ「三足のわらじ」で、多忙な日々を過ごしています。



この町に住み、働くことに誇りを持ちたい

以前は、スーツやヒールでビシッと決めて、いい会社でバリバリ働く同世代の友達と自分を比べてしまい、利根町に住んでいることや、自分の家が肉屋だということがコンプレックスだったという里奈さん。

それでも、「自分の選んだ道はこれ。せつかく利根町に生まれて、利根町で働いているんだから、この町にも仕事にも誇りを持ちたい。」と考えるようになり、積極的に「いいとこ探し」を始めたところ、この町がどんどん好きになって、この町で仕事をしていることが楽しく感じられるようになりました。

「だから、若い人で、もし昔の自分と同じように考えている人がいたら、せつかく生まれ育った町なんだから、もっと誇りを持って欲しいと思っています。また、誇りが持てるように、自分たちで変えていこうよ！って言いたいです。」

大切な癒しの時間

幼いころから、何にでも興味を持つ好奇心旺盛な子どもだったという里奈さん。母、行美さんがやっていた書道にも興味を持ち、小学3年生から習い始めたという書道は、大人になった今でも続けているそうです。

また、絵に関しても、幼稚園時代のお絵かき教室のクレヨンから始まり、水彩画や油絵などを、小学校を卒業するまで習っていました。今でも大切な趣味として、時間のある

元々は生徒として通っていたという料理教室。いきいきと働いている講師に惹かれ、自らも料理講師として働くことに



撮影協力
ABCクッキングスタジオ



幼いころから続けている絵や書道の特技を活かし、飲食店のメニューのイラストや看板の題字を任されたことも。左は、ラーメン味よし（横須賀）の看板。右は、レストランドルチェ（羽根野）のメニュー表

ルーツは、アイスクャンディー屋



「肉のながさわ」のルーツは、70年以上前に里奈さんの曾祖父にあたる已之助さん（右）が始めたというアイスクャンディー屋さん。その後、食堂やラーメン屋を経て肉屋になった



平日の午前はコンビニで働き、午後は母、行美さんとともに店に立つ里奈さん。お肉屋さんにしては珍しく（？）店員さんは全員女性。ついつい、お客さんとおしゃべりも長くなるとか

自分らしく、マイペースで

里奈さんに、今後の夢を伺うと、「幸せのかたちは色々あるし、常識も価値観も人の数だけあると思います。」

趣味で続けていた絵や書道も、他のお店のメニューや看板に使ってもらえたり、自分の作品が、誰かのために使ってくれているのなら、それはすごく幸せなことだなんて思っています。

今は、自分の好きなことが仕事になっているので、毎日がすごく楽しくて充実しています。だから、今は、このまま自分らしくマイペースで仕事を続けて、地域の皆さんに感謝と真心がいっぱいの食品を届けたいです。」と笑顔で答えてくれました。

「人のため、地域のため」との先代の思いを、母やスタッフと共に守りつつ、新しい店作りにも、そして新しい働き方にチャレンジしている里奈さん。少子高齢化に伴う人口減少や、若者の転出、個人商店では後継者不足という課題も多いこの利根町において、里奈さんのような若者たちの活躍は、利根町の宝。布川のまちの小さなお肉屋さんでは、今日も元氣な看板娘の笑顔がキラキラと輝いています。